

PAM通信 コラム

2011年8月発行

<第53回> 後日談

先ずは下記の文章を読んでみてください。Oさん（私の知人）が自分の体験を聞かせてくれた話です。

何年前かにOさんは友人たちと廃墟（廃病院）に霊を見に出かけました。そこは心霊スポットとして有名な場所なのですが、その時に起きた事件のこともあり明記は避けたいと思います。その日Oさんたちは現地に深夜の2時過ぎに着きました。見物客がたくさんいると聞いていたその場所には、なぜか誰もいませんでした。その不自然さに不安を抱えながらも、Oさんたちは霊が出ると噂される手術室を目指し廃墟の中に入って行きました。Oさんは歩きながら誰かに付けられているような気がしていたと言います。窓ガラスのなくなっている廃墟の1階は、先が月明かりで見渡せたのですが、手術室のある地下に続く階段は何も見えない暗闇でした。階段を下りると、どこからか“苦しみ唸る声”とも“風の音”ともつかないものが聞こえてきました。Oさんたちは危険を感じ「帰ろう」と話しながらも先へ進んで行きました。すると今度は友人の一人が「やめろ〜」という声を聞いたと言い出しました。さすがに怖くなったOさんたちは引き返すことに決めました。しかし、好奇心が旺盛で霊の存在を信じないKさんだけが1人で手術室を見てくることになりました。Oさんたちは廃墟の入口まで戻り待つことになり、Kさんは1つだけになってしまった懐中電灯の明かりを頼りに手術室の方向に歩いて行きました。1人きりになったKさんは床に散乱するカルテだったらしき紙を踏みながら進んで行きました。手術室の入り口に着いたKさんは恐る恐る部屋の中を懐中電灯で照らしました。しかし、そこに霊の姿はありませんでした。さらに、横たわっている霊の姿が見えるという手術台まで進みましたが、そこにも何もありませんでした。その時、後ろで手術室のドアが閉まる音がしました。振り返るとそこには手術衣のお腹の部分が黒く染まり、よく見るとお腹から飛び出した臓器が服の下に透けて見える霊が立っていました。予期しない霊の姿を見たKさんは恐怖で動けなくなりました。ふと足に温かいものを感じたKさんが目線を下げると、自分のお腹から飛び出した臓器と、そこから流れ出した血が足を伝わるのが見えました。

Oさんたちは、なかなか戻ってこないKさんを廃墟の入り口で待ち続けました。空が明るくなり始めたころ、Oさんたちはあまりにも遅いKさんを探しに手術室に向かいました。Oさんたちが手術室のドアを開けて見つけたのは、お腹を押さえ苦悶の表情で冷たくなっているKさんの姿でした…。

Oさんの体験をどう感じられましたか？Kさんが手術室で見た霊の正体は何なのでしょう？Kさんにはいったい何が起こったのでしょうか？

実は、この話には公にし難い“後日談”があります。後日談を聞きたい方は、この話の感想を添えて下記のアドレスまでご連絡ください。個別に後日談をお聞かせします。（TK）連絡先：tamura@pa-machida.co.jp